

## アーティストによる美術史講座

### 第2回 ゲスト：岡田裕子編 レポート

2021年12月12日（日）14:00-16:00

オンライン実施

アーティストの岡田裕子氏をゲストに迎え、自身の幼少期から現在に至るまでを、当時の岡田さんに影響を与えていた「美術」から振り返ることで、どのように「岡田裕子」というアーティストが生まれたのか、個人史と美術史をクロスオーバーしながら辿っていくユニークな回となりました。

「私美術史講座」と題し、幼少期、小学生、中高生、大学生、大学生以降と5つの時代に分け、各時代でどのような美術体験があり、どのようなアーティストやアートの考え方に影響されていたのかを振り返っていきます。

まずは、幼少期、キーになったのは、「ベルサイユのばら」（池田理代子、集英社）（図1）です。中高生を対象とした雑誌『週刊マーガレット』（集英社、1972～1973）で連載されていましたが、岡田さんが出会ったのは幼稚園に通っていた頃、「キラキラ、フワフワとした浮遊感のようなものに衝撃を受けた」と言います。舞台となった1750年代のフランスでは、ロマン主義が花開いており、岡田さんは、作者は当時の美術作品を参照していたのではと考えます。ロマン主義は、感情的、叙情的な表現に特徴があり、岡田さんはその雰囲気や「浮遊感」として捉えました。フラゴナールの《ぶらんこ》（1767）（図2）でみられるように、「空気が舞っている」雰囲気や「ベルサイユのばら」で岡田さんが衝撃を受けた「浮遊感」とつながっているのでは、と言います。

また、「ベルサイユのばら」では、貧富の差、ジェンダーギャップ、同性愛といった要素も多く、それらが当然のこととして漫画に描かれていた、ということが自身に大きな影響を及ぼしたと言います。「ベルサイユのばら」以降、男装の麗人や同性愛が登場する作品が多く出版され、そうした漫画の影響で岡田さん自身は性自認への感覚が薄く、実社会に出てから逆に疑問を持つようになりました。男性が出産するようになった社会をテーマにした《俺の産んだ子》（2003、ビデオ、2019リマスター）（図3左）、後日談的な《未来図》（2003、ビデオ）（図3右）

など、自身の作品への影響があると振り返ります。



図1（動画よりキャプチャ）



図2（動画よりキャプチャ）



図3（動画よりキャプチャ）

ここで岡田さんの世代的な背景についても考えてみます。第二次世界大戦を経験した親世代に対し、高度経済成長を遂げたあとの最初の世代になります。「ベルサイユのばら」に熱狂する、「金髪のヨーロッパのお姫様に憧れる敗戦国の少女たち」の姿は、親世代との「ねじれ」ではなかったかと振り返り、そうした「ねじれ」が岡田さんの作品の根底にもなっていると云います。

《SINGIN' IN THE PAIN》(2005年、ビデオ)(図5)は、自殺する主婦を主人公に、高度経済成長以降、形作られた「幸せな女性像」と現実とのギャップによっておこる「ねじれ」がテーマになっています。また、《愛憎弁当》(2007年、ビデオ)(図6)では、アメリカ在住の料理研究家が日本の子どもたちを教育する弁当をつくるという設定で、教育や母親の役割といったことが引き起こす「ねじれ」が見え隠れします。

次に、「アーティスト」のイメージが形作られた小学生時代を振り返っていきました。この頃、頻りにテレビに出演していた岡本太郎が「芸術家」として初めて認識したアーティストだったと言い、その激しいパフォーマンスや言動から「芸術家は怪しい人」というイメージを持ったそうですが、当時のテレビ出演は、自らがアートの広告塔となることで、アートの存在をアピールすることが目的だったので岡田さんは考えます。それは、今もなおアーティストは怪しい、変な人、常識がない人だと見做される自身の経験ともつながっています。

中高生時代、絵画教室に通うことになります。講師を務めていたのは、近代洋画家の一人、宮本三郎(1905~1974)の弟子であった人で、当時の近代洋画の世界を語って聞かせてくれたと云います。宮本三郎は従軍画家として成功した作家の一人ですが、敗戦後、自身の経歴などに悩み、以降は裸婦を多く描き思索的な作品を残しました。その宮本が住んでいたエリアが、岡田さんの地元であったという偶然も、興味深い点です。

多摩美術大学の洋画科に進学した岡田さんは、それまで触れる機会がなかった「現代アート」に初めて出会い、衝撃を受けます。川俣正、遠藤利克、JR、クリスト&ジャンヌ=クロードといったアーティストたちの「現代アート」から受けた、「こういうアートもあったのか」という大きな衝撃が若い感性に与えた影響は、今も強く残っているそうです。



図5 (動画よりキャプチャ)



図6 (動画よりキャプチャ)

最後に、美大卒業以降、どのように現在につながっていったのかを「自画像」を軸に見つめ直していきました。「自画像」は美大受験の必須項目で、当時は大嫌いだったと言います。しかし形を追う以外の意義があるのではないか、と考え直します。美大を卒業してすぐの1994年、作家として立っていくという決意を込めて《Hの顔》(図7)を制作します。その後、制作された作品群は、さまざまなかたちでの「自画像」であったと振り返ります(図8,9,10,11)。いわば自身の自画像的なものとしての作品は、《SINGIN' IN THE PAIN》や《愛憎弁当》がそうであったように、「女性が抱える鬱屈」や「社会のなかにあるねじれ」が作品の根源になっており、次第に「フェミニズム・アーティスト」として見做されるようになっていきます。

岡田さんのアーティスト史を含めた個人史と、当時の美術の流れ、そしてときに社会の様子をクロスオーバーしながらみてきた今回のレクチャーは、「美術は別の世界のものではなく、社会と連動しているものと意識し、自覚する」という視点を教えてくれるものでした。

(レポート松村淳子)

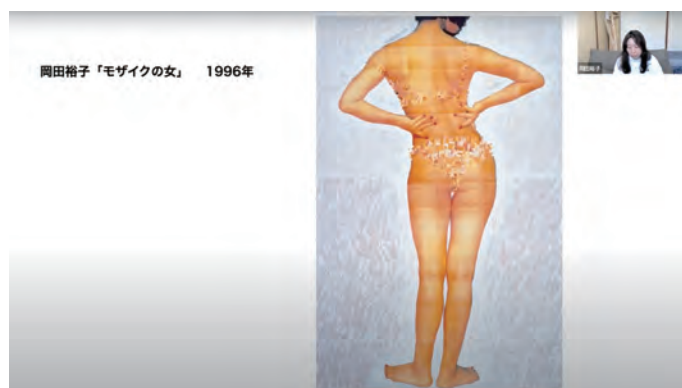


図8 (動画よりキャプチャ)



図9 (動画よりキャプチャ)

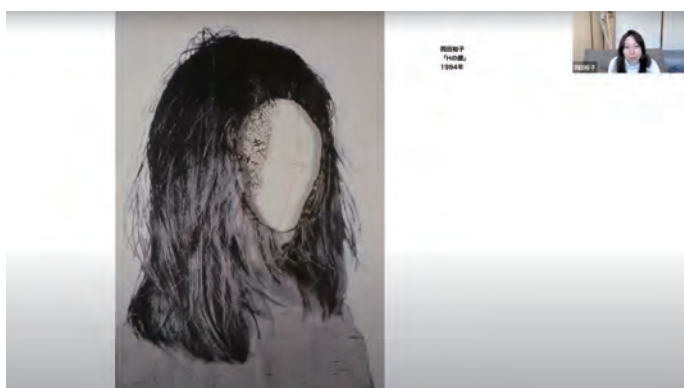


図7 (動画よりキャプチャ)



図10 (動画よりキャプチャ)



図11 (動画よりキャプチャ)